

ルサーン国際戦争と平和博物館(1)

Peter van den Dungen

坪 井 主 税 (訳)

訳者まえがき

ピーター ヴァン デン ダンガン

本翻訳は、在英の平和史(peace history)研究者 Dr Peter van den Dungen が1981年にスイス歴史学会誌(*Schweizerische Zeitschrift für Geschichte*, vol.31, pp.185-202)に発表した英文の論文 THE INTERNATIONAL MUSEUM OF WAR AND PEACE AT LUCERNE を、著者の了解を得て、翻訳したものである。著者 Peter van den Dungen は、1977年に『ジャン デ ブロッホ平和著作目録(*A Bibliography of the Pacifist Writings of Jean de Bloch*, London, Housemans)』を上梓して、ジャン デ ブロッホを歴史の忘却から蘇生させ、1981年には本論文を発表してジャン デ ブロッホのルサーン国際戦争と平和博物館創設という偉業をわれわれに知らしめ、1999年2月にはロシア・サンクトペテルブルグで開催された「将来の戦争—イワン ブロッホ会議」(註 「イワン ブロッホ」は、ジャン デ ブロッホのロシア名)に招待され、1899年オランダ・ハーグで開催された第1回万国平和会議におけるジャン デ ブロッホの役割について基調講演し、同年5月のハーグにおける平和史学会(Peace History Society)においては、ジャン デ ブロッホ分科会を組織してヨーロッパ・アメリカ・日本のジャン デ ブロッホ研究者間の国際的連帯を図るなど、ジャン デ ブロッホ研究の第一人者である。現在著者は、ジャン デ ブロッホをより人口に膾炙させんと2つの国際会議を企図している。1は、2002年1月の「ジャン デ ブロッホ没後100年記念国際会議」であり、2は同年6月の「ルサーン国際戦争と平和博物館100年記念国際会議」である。前者については、ジャン デ ブロッホ生誕および死去の地ポーランド・ワルシャワに新生したジャン デ ブロッホ協会(TOWARZYSTWO JANA GOYLIBA BLOCHA, 会長 Dr Andrzej Werner)が主催者となることが決まっており、後者については、スイス・ルサーン市の主催となるように鋭意折衝中である。著者と25年来の知己であり、また、ジャン デ ブロッホの研究仲間でもある訳者としても、著者同様、ジャン デ ブロッホをより多くの研究者—とりわけ日本の研究者—に知らせる試みを実際にしなければならないと思ってきた次第である。本翻訳は、その試みの1つである。

原文は17頁に亘るかなり長いものである。したがって、本翻訳は本号と次号の2回に分けて行うことにした。便宜上、原文にある小見出しを、日・英両語で示せば、次のとおりである。(ただし、下記の「はじめに」と「小見出しのまえの番号」は原文にはなく、訳者が付けたものである。)

はじめに

1. ジャン デ ブロッホとその著作『将来の戦争』
(*Jean de Bloch and the War of the Future*)
2. 反戦運動の救世主・ブロッホ (*A Vision of Peace*)
3. ルサーン国際戦争と平和博物館 (*The Lucerne Museum*)
4. 「平和展示」論争 (*Controversy over the Museum's Character*)
5. グロウスキー事件 (*The Affair Gurowski*)
6. 財政難—そして、閉館 (*Difficulties and Liquidation*)

(以上、本号)

はじめに

「ロイス川の左岸、ルサーン駅の右には、中世の城のような国際戦争と平和博物館がある。この博物館は、1902年に亡くなったロシア国枢密顧問ジャン デ ブロッホの提唱によって建てられたものである。過去の戦争の実相や将来の戦争の恐怖を分かりやすく展示しながら、平和のための運動を促進しようというのが、本館の目的である」と、1903年版のベデカー旅行案内書は、国際戦争と平和博物館をルサーン市の最新の観光名所として紹介している。⁽¹⁾ このルサーン国際戦争と平和博物館は、1902年6月7日に公式に開館した。開館式には、ヨーロッパ各国の平和主義者が、絵のように美しい小都市ルサーンに押し寄せきた。彼らは、この歴史的な機会を失すまい、同時に、同博物館の建設を進めながらも、不幸にして、その開館を前に没したジャン デ ブロッホに敬意を表さんとやって来たのである。開館式は、ブロッホの息子アンリの謝辞の後、フレデリック パシイが指名され、博物館入口の扉を押さえていたテープに鉄を入れて始まった。パシイがこの記念すべき役割を果たす者として選択されたのは、至極当然のことであった。パシイは、この時既に80才であったが、ヨーロッパの平和運動の最古参であり、前年12月には、ノーベル財団からアンリ デュナンと共に第一回ノーベル平和賞を授与された人物だったからである。「新しい時代の扉を開きます」と言いながら、パシイはブロッホの遺族を先導して館内に入り、その後に参加者が続いた。館内では、ルサーンの彫刻家ヨゼフヴェターが制作した、実物より少し大きいジャン デ ブロッホの胸像の除幕式が行われた。ここでもパシイがブロッホを称える話をした。パシイの話はやや長く、ブロッホが人類のためにいかに多くの貢献をしたかを綿綿と語った。その後、ブロッホの遺族とベルタ フォンズトゥナーからの月桂樹献花そしてルサーン市音楽隊の讃美歌があつて、公式的な開館式は終了した。⁽²⁾ 午後、ブロッホの遺族主催の祝宴がナショナル ホテルで催され、約二百人が招待されたのであるが、その多くがテーブルスピーチでジャン デ ブロッホを称える話を延々と繰り返りひろげたのである。⁽³⁾

註 1. *Baedeker's Switzerland*. Leipsic, Karl Baedeker, 1903, p. 100.

2. 開館式の様子については、例えば次を参照せよ。A. H. FRIED, *Die Einweihung des Kriegs- und*

Friedensmuseums in Luzern in: Die Friedens-Warte, vol. IV, nr. 11/12, 30. Juni 1902, pp. 84-89.

3. テーブルスピーチの1つは英訳されている。SAMUEL JAMES CAPPER, *Translation into English of a Speech...at the Banquet at the Hotel National Lucerne (etc.)*. Lucerne, Keller, 1902.

1 ジャン デ ブロッホとその著作『将来の戦争』

ルサーン国際戦争と平和博物館開館のニュースは、広く各方面で報道された。なかんずく主要な新聞はみな、実に詳細な記事を書き報道した。同博物館の特異な存在というだけでも十分なニュースバリューがあったからなのだが、それに加えて、創設者があの有名なブロッホであるということや、そのブロッホが博物館建設に必要な資金の大半を提供したばかりではなく、どのような博物館にするかを自ら企画したということ、したがって博物館はブロッホの思想を具体化したものであるということ、さらには、そのブロッホが博物館の完成を見ることなく死去してしまったということなどが、新聞の注目をいや増しにしたのである。もし、この世に流星のような存在の平和主義者がいるとするならば、ブロッホはまさにそれであった。

ジャン デ ブロッホの名は、実は、1898年までは西側世界では殆ど知られていなかった。わずかにロシアやポーランドの金融や鉄道など経済分野の研究をするごく限られた数の学者に知られている程度であった。それは、それらの分野におけるブロッホの研究が無視できないほど歴大であったからである。しかし、ブロッホの将来の戦争をテーマにした全六巻の著作が独・仏語に全訳され刊行されるや否や、さらに、英国・米国においてそれらを一冊に要約した英語版が刊行されるや否や、一夜にして、ブロッホの名は誰もが口にするものとなったのである。ブロッホはその著作を、いわば「引退時」に書いた。だが彼は、その著作の刊行からその死に至るまでの数年間に、普通の人ならその全生涯を掛けなければならなかったであろう第二の人生を歩いたのである。ブロッホは、博物館を創ろうという伝導者的熱意を持って、ヨーロッパ中を駆け巡った。そして、世界に新たな軍事的・政治的新展開—たとえそれが南アフリカであろうが、アジアであろうが、あるいはまた、自国ポーランドであろうが—が起これば、そのすべてに注視の目を向けたのである。ブロッホの名声をさらに確固たるものにしたのは、1899年のロシア皇帝の要請で開催された第1回ハーグ万国平和会議であった。それは、この会議を発議したロシア皇帝に強い影響を与えた人物がいて、それはブロッホである、という憶測がなされていたからである。この憶測は、今日もなお一般的である。だが、実際ブロッホがどんな役割を演じたのかという事実については、いまだ明らかにされていない。「伝説的憶測」の全容解明なしに、平和主義者たちはブロッホの同会議との関わりを過大評価してきたとも言えるし、外交史家たちはそれを過小評価してきたとも言えるかもしれない。

ブロッホがニコライⅡ世にどんな影響を与えたかの問題はさておき、ブロッホの著作『将来の戦争』にはいくつかの点で注目すべきものがある。第一は、著作のための資料収集とその分析に、助手の協力があったとはいえ、8年の歳月を掛けたことである。その結果が、部厚い全

六巻、総頁4000という圧倒的なものになったのだが、全六巻ということだけでも感動的であり、注目に値する。なぜなら、ブロッホ以前の平和主義者の書いた啓蒙本などは、せいぜい一冊の薄っぺらなパンフレットか小冊子であって、二巻以上のものはなかったからである。第二は、ブロッホがその分析と結論を正当かつ説得的なものにするために大変な努力をしたということである。彼は、実に多くの統計表やグラフ、図、絵を用い、それらを通して、各種新兵器の命中精度や殺傷能力の実験結果を紹介した。そうすることによって、自らの主張が厳然たる事実と数字にもとづくものであることを論証したのである。ブロッホは、将来において戦争が起これば、それは必然的に「全面戦争」—すなわち、戦争当事国の経済的資源すべてを動員せざるを得ない戦争—にならざるを得ないという見通しに立って、戦争当事国の経済および純軍事的・技術的要因と社会的・経済的要因の相関関係にスポットを当てたのである。ブロッホの将来の戦争に関する包括的な、そして、現実的な視点は実に新奇なものであった。これまで、軍事専門家はその著作に当って、自分の関心や知識の外にあるものに対して無視してきた。同じように、平和主義者は軍事的問題を無視してきた。ブロッホの著作は、これら両者の間にあるギャップを埋め、両者のアプローチを組み合わせることによって、両者それぞれの陣営で有名になったのである。前者からは礼賛され、後者からは少なくとも精読され、時に批判的な同意を得た。このことがまた、ブロッホをして極めて特異な人物にらしめたのである。

第三の注目すべき点—これは、著作が科学的であるということに関わるのだが—は、ブロッホをして著作に向かわしめた最初の動機である。ブロッホは、研究当初、確信を持った平和主義者ではなかった。したがって彼の著作は、反戦運動を促進するという意図はなかったのである。ブロッホは、各国の軍人たちを見、彼らが将来起こるかもしれない大戦争に対してもなお、その遂行と帰結に甚大な影響を与える経済的要因にいささかも留意せず、旧態依然として軍事的なことにも終始する傾向を示していたので、彼らの見誤りを正し、将来の戦争は可及的効率的になされなければならないことを、各国の経済状態を正確に紹介しながら、論証しようとしたのである。ブロッホはかつて、ロシアのいくつかの鉄道建設に従事し、軍隊を前線に搬送する仕事をしたことがあった。そこでブロッホは、軍人たちが大戦争の持つ経済的要因の重要性にいかにも無知であるかをつぶさに見た。このことは、ブロッホのロシア金融史の研究によくあらわされている。鉄道建設者、銀行家、経済家そして学者であるブロッホこそ、まさに、このこれまで見過ごされてきた複雑な戦争研究の最適任者であった。ブロッホの目には、他国の軍隊もロシア軍と変わりなく、将来の大戦争の特徴についての無関心と無知が横行していると写った。それが彼を真剣な研究へ向けさせたのである。こうした明確な切り口があったればこそ、ブロッホの著作には客観性と科学性が備わったのであり、そしてそのことが、軍人集団の関心と呼んだのである。「ブロッホは、ニュートンが万有引力の法則の伝導者であり、ダーウィンが種の起源の伝導者であったというような意味での平和の伝導者ではなかった。彼は、社会科学の学者・研究者であり、同時に、いくつかの特定の事実を一般法則に当てはめ、そこから

哲学的結論を導く思想家であった」とは、後に、ベルタフォンズトゥナーがブロッホを形容した言葉である。⁽⁴⁾

ブロッホは、しかし、その著作の最後で下した結論によって平和主義者になったのである。その結論とは、大国間の将来の戦争は不可能であるというものであった。「戦争の不可能性」という彼の言葉は、あまりにも有名であり、しばしば誤解されてもきた。彼がこの言葉に込めた意味は、そうした戦争はもはや問題を解決する合理的な道具であり得ない、なぜなら、それは必然的に戦争当事国相互の経済的、社会的、政治的破壊を導くからであるということだったのである。そうした戦争が起これば、「目的」—たとえどんなものであろうと—と戦争という「手段」との関係が無意味なものになってしまう。手段が目的を呑み込み、食い尽くしてしまう。大国間の戦争は、ただただ破壊的で、破滅的になり、何百万という殺戮と既存の秩序の壊滅に至るだけである。ブロッホの結論の正しさは、後の第一次世界大戦が証明することとなった。同大戦の全体的特徴や帰結についてのみならず、多くの戦闘行為のディテール—とりわけ塹壕の使用、長期に亘る戦闘、手詰まりを打開せんとして無為に失った膨大な数の命—においても、ブロッホの予見は的中してしまったのである。このブロッホの先見の明に対して、もう一人の予言者H.G.ウェルズがホロコーストが相次いだ大戦中に書いた言葉—大方の人はもう忘れてしまったかもしれないが—がある。「第一次世界大戦は、ブロッホの戦争なり。」⁽⁵⁾

「戦争の不可能性」というブロッホのテーマは、彼の著作を注目させた第四の要因であろう。なぜなら、それは、ジャーナリストがセンセーショナルな見出しや記事を書く格好の口実になったからである。事実彼らは、その記事の中で、ブロッホが戦争はもはやなくなるであろうと言っているとか、古いゲームはもう一回で終わりになると予言しているとか、と書いたこともあった。ブロッホの著作の最初の英訳本のタイトルを『戦争はもはや不可能か』とした英国の新聞記者W.T.ステッドは、こうしたジャーナリストの代表であった。ステッドの英訳本を読んだ書評家や注釈者は、ステッドの付けたタイトルでその書評や注釈をせざるを得なかったし、辛口の批評家さえ、ブロッホの著作刊行後ポーア戦争が勃発するという明らかな矛盾に当面しながらも、『戦争はもはや不可能か』というタイトルで批評せざるを得なかったのである。

4. BERTHA VON SUTTNER, *La Thèse de Jean de Bloch*. Paris, Imprimerie, Paul Dupont, 1902, p. 29.

5. H. G. WELLS, *Der Krieg Blochs* in: *Die Friedens-Warte*, vol. XVIII, nr. 5, Mai 1916, pp. 147-149.

2 反戦運動の救世主・ブロッホ

『将来の戦争』の完成後、冷静かつ客観的な学者ブロッホは、反戦運動の献身的な救世主となった。彼の話が聞きたいという者がいれば、厭うことなく、何処にでも行った。また、自らも自説を開陳できる機会を作った。そのために必要な金は、惜しみなく使った。1899年の第1回ハーグ万国平和会議の時は、ハーグに数週間滞在し、非公式ながら多くの各国代表に話しかけ、彼

らにできるだけ大きな影響を及ぼそうとした。ブロッホとしては、そうすることによって、同会議が何らかの実際的な平和への突破口を生み出せるのではないかと思ったのである。ブロッホの「魔法のランプ的考察」と銘打った4回連続の講演会には、毎回、各国代表や平和主義者、ジャーナリストそして一般大衆が数多く聴きにきた。ブロッホは、自分の著作を全巻読む時間的ゆとりのある人や読み切る勇気のある人はごくわずかしかないであろうということをよく自覚していたので、予め会議前に、著作の結論を要約した2冊のパンフレットを用意しておいて、それを参加者に配布した。ブロッホの講演内容も同様、予め印刷しておいて、それを無料で配った。

第1回ハーグ万国平和会議が終わるや否や、ブロッホは次の計画—すなわち、1900年のパリ万国博覧会時の特別戦争展—に取りかかっていた。この計画のために100万フランを用意し、それで、大講演会場を含めた三階建ての建物を立てる気でいたのである。1899年の秋、計画を実行に移すべく、ブロッホはパリに赴き視察し、その際、「パリ万博戦争展」なる予告プログラムまで作成してしまうほどの熱の入れようであった。⁽⁶⁾そしてそのプログラムに、展示物は万博終了後も保存し、ロンドンやその他のヨーロッパやアメリカの大都市に巡回展示物として送れるようにすると書いていた。彼はさらに、展示物の最終保存地はハーグもしくはスイスのベルンで、そこに、戦争の不可能性を展示する博物館—平和の殿堂—を建てる計画であるとも書いた。ブロッホはこの博物館建設計画の成功にいささかの不安も抱いていなかった。なぜなら彼はすでに、パリにおける戦争展の利益を平和の殿堂建設の寄付金にする決心をしていたからである。⁽⁷⁾

しかし、翌1900年に入って間もなく、ブロッホが予定していたロシアからの展示物に対して猛烈な反対の声が上がったのである。ブロッホは已むなく、ロシア展示物をカットすることにした。反対の声の出所は、おそらくロシア軍人であったであろう。なぜなら、彼らは以前ハーグでも、ブロッホを沈黙させるために「モスクワに通報するぞ」と脅しをかけてきたことがあったからである。ブロッホはそんな脅しに屈するような人物ではなかった。彼は、ロシア皇帝枢密院の顧問であったし、ロシア皇帝自身とも、彼の著作について個人教授するほど親密だったからである。したがって、ブロッホに反対する声は、皇帝ニコライ2世から出たものではなかったことは明白であった。⁽⁸⁾

ブロッホは当初から戦争展の準備や組織を多くのスイス軍人に委託していた。そのこともあって、こうなった今、ブロッホの展示物は彼らと親しいベルン常設平和ビューローと中央フランス平和ビューローが共催する「平和協会展」会場と「社会科学展」のスイス会場に展示されることになった。⁽⁹⁾一部は、「教育展」会場にも展示された。教育展会場に展示されたのは、32枚の縦180センチ横90センチの図表で、その内容は、ブロッホの著作を要約したものであった。それらは、戦争のメカニズム、海戦、戦争がもたらす経済的・財政的結果という3分野に分かれていた。どの図表にも、短い説明文か著名な軍事専門家や軍事経済学者の言葉が付けられて

いた。ブロッホは、自分自身の紹介文の中に、『将来の戦争』を書き上げるのには多くの困難があり、多くの時間が必要であったと書いた。こうして、パリ万博は、開催中南アフリカで戦争が勃発するという事態の中で、「将来の戦争の実相と後遺に関するすべての情報を表象的方法で大衆化する絶好の機会」を提供することになったのである。⁽¹⁰⁾

「耳に語り掛けるよりも、目に訴える方がより効果的である」⁽¹¹⁾ という信念と自分の理論や研究成果を可能な限り図解したいというブロッホの強い願いは、すでに彼の著作に現れていた。彼の著作を読む者は、そこに織り込まれている図・表の場所にくると、自動的にそれらに目を奪われ、数頁の説明文を読むよりも、より鮮明な、そして直接的・永続的な印象を与えられたのである。ハーグ講演時のスライドの使用やパリ万博時の図表の使用は、この著作における試みの第二弾であった。ブロッホの博物館建設構想は、まさしくこの延長線上にあったのである。ブロッホはパリで、この構想を実現すべく、詳細な検討を進めていた。画家に会ったり、手間暇掛けて映画撮影装置を扱う光学器具商や製造メーカーを丹念に調べたり、さらには、古今使用されてきた兵器の実物を購入するための問い合わせをしたりしていた。ブロッホにとって、博物館建設はどうしてもやらねばならぬ仕事であった。なぜなら彼は、博物館なら、今は彼の手の届かないところにいる多くの大衆の注意を引きつけられると考えていたからである。自分の部厚い著作がベストセラーになることはないと自覚していたブロッホは、著作の抜粋や一般読者向けの要約が有効であったように、最良の、そして、おそらく唯一の大衆への接近の道は、博物館—それも、そこに展示されている現象の歴史がそこで消滅すべきであると来館者に伝えることをそのレーゾン デートルとする博物館—であると考えていたのである。ブロッホの博物館が伝えるメッセージは、近代の軍国主義を創出した勢力が、いま、その欠陥をさらけだしているというものであった。ブロッホは、ますます民主々義的な傾向を深めつつあるこの時代にあって、大衆が戦争絶滅のプロセスで重要な役割を果たし得るし、支配者—たとえ君主国にあっても—も、自分たちの失墜を覚悟せずして大衆の感情を無視できなくなってきたというリベラルな考えを享有していた。平和主義的政策なくして、反戦運動の裏に潜んでいる大衆の感情を抑えることはできなくなっていたのである。戦争の絶滅とは大衆の無知の根絶と同義、とブロッホは捉えていた。ブロッホにとって、平和主義の啓蒙と博物館という手段によるこの目的の遂行とは一体化していた。そしてそれは、世俗的な不安—すなわち、実際にそんな計画を実行できるのかという不安—で薄められることはなかった。それを実現するために必要な財政的負担を自ら担い得るほどにブロッホは富裕であったし、博物館への投資を人生最良の投資とブロッホは考えていた。ブロッホは、そこから生ずるであろう利益は全人類に還元され、文明の大義を伸長させるものであると思っていたのである。ルサーン国際戦争と平和博物館は、こうした最良の博愛主義の伝統の中で建てられたのである。

6. JEAN DE BLOCH, *La Guerre à l'Exposition de Paris*, Imprimerie Paul Dupont, 1899, p. 56.
7. *Die Ausstellung des Krieges* in: *Die Friedens-Warte*, vol. I, nr. 19, 6. November 1899, p. 123.
8. *Die Ausstellung des Krieges* in: *Die Friedens-Warte*, vol. II, nr. 2, 8. Januar 1900, p. 6.
9. A. H. FRIED, *Von der Pariser Weltausstellung. I. Die Ausstellung des Berner Bureaus*, in *ibid.*, vol. II, nr. 24, 18. Juni 1900, pp. 94-95.
10. JEAN DE BLOCH, *La Guerre Future. Que sera-t-elle? Résumé et conclusions des tableaux exposés par Jean de Bloch*. Exposition Universelle, Paris, 1900. Palais de Congrès, Section Suisse. Paris, Lib. -impr. réunies, 1900 (p. 4).
11. FRÉDÉRIC PASSY, *Jean de Bloch et le Musée de la Guerre et la Paix*, Paris, Imprimerie Paul Dupont, 1900, p. 20.

3 ルサーン国際戦争と平和博物館

ブロッホは最終的に、スイスのルサーン市を博物館建設の地と決めた。ルサーン市は、スイスがヨーロッパの中心にあるように、スイスの中心に位置していて、交通至便な有名な観光地であった。大勢の人が集まる場所という点では、ブロッホの必要条件を満たしていた。スイスが中立国であるということも、ブロッホの選択に有利に働いたであろう。1900年、ブロッホはルサーン市当局者を前に講演し、そこで、博物館創設の話をしたのである。市当局者たちは、ブロッホの提案に賛成し、市として好意的な計らいをすることを約束した。ブロッホは以前、保養のために、このルサーンに来たことはあった。しかし、そのルサーンを彼の展示物の恒久的保存地にするという考えは、おそらく、彼がパリの戦争展示で知り合ったスイス軍人、特に、アーラウ出身のバーチャー陸軍大佐とベルン出身のエグリ陸軍少佐から出たものと思われる。⁽¹²⁾ この二人は、今度は、博物館建設のために重要な役割を果たすことになった。1900年10月31日、ルサーン博物館建設発起人会一二週間後、ルサーン博物館会社となる一が設置され、ブロッホと正式に契約を結んだ。⁽¹³⁾ その趣意書によれば、博物館の建設とその運営に必要な総資本金は180,000フランで、そのうち100,000フランは一株500フランの株を200株発行して調達し、残りの80,000フランはブロッホが負担するということであった。ブロッホはこの他に、70,000フランを分割で寄付することを申し出ている。さらにブロッホは、100,000フランに相当する展示物も、無償で提供したのである。そして、それらの展示物は、同市が1901年の全スイス射撃大会用に建設した建物を改修して、そこに収容されることになったのである。⁽¹⁴⁾ その建物は、まるで中世の城のような外観を持ち、周囲の景観によくマッチしていて、ルサーン来訪者の目を引きつけずにはおかないものであった。建物の位置は、湖岸にある駅のすぐ横、後方に聳え立つピラトゥス山やスタンホーン山が見える所であった。「ヨーロッパ中どこを探しても、ここに如く所なし」と、当時の有名な平和主義作家が称えた場所であった。⁽¹⁵⁾

ルサーン博物館の準備に追われながらも、ブロッホは1901年の夏、時間を見つけてロンドンに行き、英国王立軍事統合研究所で何回か講演した。これらの講演は、英国職業軍人の招待によるものであった。彼らは、ブロッホに対して敬意を抱いていたのである。なぜなら彼らは、

ブロッホの見解の正しさを自らの南アフリカにおける戦争で日々立証してきた経験があったからである。一方ブロッホは、こうした機会を利用して、ロンドンのアールズコートにある展示会場を借り受けておいた。それは彼がそこで、翌年の1902年の春に、スライドを使いながらの講演会を計画していたからである。このようにブロッホは、ルサーン博物館がまだ完成しないうちから、他の都市でもルサーンと同じことができまいかと考えていたのである。ブロッホはE. D. ミードに自らの構想を認めた長いタイプ打ちの手紙を送り、それを、協力してくれそうなウィリアム・メイザーやジョージ・カドベリなど英国の主だった平和主義者に回覧してくれるように頼んでいた。米国のニューヨークやワシントンも博物館建設地として好適である、とも語っていた。⁽¹⁶⁾ こうした博物館すべてをブロッホがその資力で賄うのは不可能であったであろう。また、それは彼の本意ではなかった。彼は、彼の構想を語ることを切っ掛けに、人々に関心を持たせ、博物館建設に向かわせようとしたのである。これらすべてのブロッホの努力と活動が、その突然の死によって、頓挫してしまったのである。

出来上がったルサーン国際戦争と平和博物館の展示会場は、まるで巨大な物置のように広く、いくつもの領域別コーナーに仕切られていた。領域別コーナーの数は14、そのそれぞれに戦争に関するさまざまな展示がなされていた。⁽¹⁷⁾ この領域別コーナーの作成に当っては、1ないし複数の専門家が割り当てられ、そこでの展示の内容や配置の仕方に責任を持たされた。専門家の多く—全部ではないが—はスイス軍人で、バーチャーやエグリなどがいた。中でも、陸軍中佐のピツカーが有能であった。

博物館に入ってすぐの広いスペースには、古今のあらゆる兵器の実物が展示されていた。そこには、それぞれの兵器の飛距離、命中精度、殺傷能力などが示され、その比較が図示され、そこから出てくる結論も書かれていた。このスペースの次のコーナーは、戦略・戦術が展示されていて、それらはギリシャ・ローマ時代から最近のボーア戦争のものを含んでいた。このコーナーの特徴は、有名な戦場場面を大きなレリーフ模型で展示するということであった。約40の模型が作られていたが、その大半はスイスにおける戦場場面であった。ヴィオレ・ルドゥの『要塞戦争』をもとにした要塞戦争の歴史に関するものも3つあった。近代兵器の殺傷能力の向上と医療活動に関するコーナーには、銃弾が貫通していたり、爆弾で粉碎された、見るからにぞっとする人間の頭蓋骨や骸骨が収集されていた。ここには、それぞれ異なった距離から発射された弾丸で射抜かれた馬の骸骨もあった。この展示は、距離の違いによる爆発力の差を示すためのものであった。スイス陸軍参謀幕僚たちによる鉄道コーナーには、戦時における鉄道の役割が展示してあった。この展示の責任者は、その後技術大学の教授になったのであるが、この時は、将来の戦争における電気の影響についての展示を担当した。歩兵部隊の役割や陸軍大部隊の構成、そして海戦を展示した特別コーナーもあった。その陸軍大部隊の構成コーナーの壁には、色塗りの図・表が張ってあって、そこには、当時のヨーロッパの大国の昔と今の軍事支出や戦費が示されていた。海軍の構成に関するコーナーだけが、軍艦の模型が入手できなかった

ということで、未完成であった。

一般来館者の目を奪ったのは、何と言っても、ジオラマコーナーで、ここは、ブロッホが生前自分自身で責任を持って企画・構成した、いわば、ブロッホの創造物と言ってもよいコーナーであった。いくつかの戦闘場面が、大きな透視画とそれによくマッチする形で配置された実際の岩、木、草の生えた斜面、軍服との組み合わせで構成されていて、見る者に実際の戦闘場面かと思わせるものであった。このジオラマコーナーは、過去と今日の戦術の違いを示すためのもので、例えば、1877年のロシア軍がプレヴナ攻撃に際して用いた戦術は、最近のボーア戦争時の分散型戦術とは対照的なものであった、というような展示がなされていた。ジオラマコーナーの評判は上々で、あるジャーナリストが言ったように、ここが開館初日の来館者の注目を一手に集めてしまったので、その他のコーナーが完全に無視されてしまったほどであった。⁽¹⁸⁾ 平和の主題をより直接的に展示したコーナーは2つあって、その1つは、戦争と武装平和がもたらす経済的支出を展示したコーナー、もう1つは国際法コーナーで、ここには、最近の第1回ハーグ万国平和会議の決定事項やこれまでに大国間で締結されたすべての条約の条文が、大きな字で書かれ、額に入れられ、壁に展示されていた。この他、さほど大きくはないが、集会室もあった。ここでは、来館者が関心を持つようなテーマの講演が、映写機を使いながら、行われた。戦争と平和図書コーナーは、後年、設置された。ブロッホは、展示物はできるだけ包括的なものにする、そして、利用できるスペースは無駄なく使うという考えから、博物館の庭のスペースにも、実物大の塹壕やボーア戦争時の覆い型塹壕の模型、同じく鉄条網塹壕の模型それに携帯用架橋用具を展示する場所を作った。これらの博物館の展示物を評してW. T. ステッドは、「完璧で、興味深く、多様である」と言った。確かに、展示物は、あまりに技術的すぎて一般来館者を惑わせるということなく、同時に、軍事に専門的に関心のある者に対しても、満足できる科学的説明を兼ね備えていた。この一般性と科学性、見せ物的要素と教育的要素の巧妙な組み合わせは、ステッドが言ったように、博物館の未来にとって良い前兆であったかもしれない。⁽¹⁹⁾ しかし、このステッドの評価をすべての平和主義者が共有したわけではなかった。

12. 次を参照せよ。JAKOB ZIMMERLI, *Das Internationale Kriegs- und Friedensmuseum in Luzern* in: *Die Schweiz*, vol. VI, nr. 15, 1902, p. 362. 殆ど不可避免的に、博物館の建設とそれへの市当局の支援に対して、同市の若干の政治家・ジャーナリストが自党の政治的利益を有利に展開させる目的で批判した。しかし、それらの批判は逆に、次のスイス全国新聞などで叩かれた。 *Ein Vorstoss gegen das Internationale Kriegs- und Friedensmuseum in Luzern* in: *National-Zeitung*, Basel, 14. 3. 1902; *Friedensmuseum in Luzern* in: *Intelligenzblatt*, Bern, 18. 3. 1902.

13. 同会社定款を参照せよ。Statuten der Aktiengesellschaft des Internationalen Kriegs- und Friedensmuseums in Luzern (この定款は1900年11月13日付のものを最初として、1909年8月30日付のものまで殆ど毎年発行された)。同定款3条に博物館建設発起人会の目的が次のように書かれている。“Durch Ausstellung der ihr durch Herrn Staatsrat von Bloch laut Vertrag vom 31. Oktober 1900 schenkungsweise überlassenen Gegenstände, sowie durch selbständige Erwerbung solcher, durch plastische und bildliche Darstellung,

- durch Vortrage usw. fur die Propaganda der Friedensidee zu wirken.”
14. *Staatsrath von Bloch's Friedensmuseum in Luzern* in: *Die Friedens-Warte*, vol. III, nr. 3/4, 28. Januar 1901, pp. 15-16; *Vom Bloch'schen Friedensmuseum* in: *ibid.*, vol. III, nr. 5/6, 11. Februar 1901, p. 21.
 15. G. H. PERRIS, *Jean de Bloch, and the Museum of War and Peace at Lucerne*. London, International Arbitration Association/Lucerne, Musée de la Guerre et de la Paix, 1902, p. 5.
 16. EDWIN D. MEAD, *Introduction* in: Jean de Bloch, *The future of war*, Boston, Ginn & Co., 1902. (同書の発行年1899年は、1902年の誤りである。)
 17. 展示目録が載っている博物館ガイドブック(数版発行されている)を参照せよ。それによれば、展示品の数は4～5千点あった。
 18. *A Museum of Peace and War. Interesting collections donated by M. de Bloch just opened to the public* in: *The New York Times*, 29 June 1902, p. 32.
 19. W. T. Stead, *Object lessons in war and peace. Opening of the Bloch Museum in Lucerne* in: *The Review of Reviews*, vol. 26, 15 July 1902, pp. 37-40.

(つづく)

(つばい ちから 人文学部教授 平和学専攻)